

UNHCR/E. PARSONS/DP/SOM. 2003



診療にあたるトネリー医師。

卒業すると、ケニア北東部でソマリア遊牧民の教育プログラムに参加。このとき初めて結核患者の苦しみを知った。1970年のことだ。肉体的な痛みだけでなく、その病いゆえに社会的に差別される心の痛みにも、彼女はショックを受けた。結核は、貧困、人口過密、栄養失調という環境のなかで猛威を振るうばかりだった。

そこで彼女は、法律の学位に加えて、熱帯医学、地域医療、結核防疫、ハンセン病について学び学位を取得した（ただし正式な内科医の資格はない）。

1970年代、新薬の登場によってそれまで普通1年から1年半かかっていた結核の治療期間が半年に短縮された。トネリー医師は、アフリカにおける結核の「短期」治療のパイオニアであり、その手法は世界保健機関（WHO）のモデルにも採用された。彼女の治療法が極めて有効（治癒率は96%という）な理由は、ほとんどが遊牧民であるソマリア人の患者たちに、完治するまで彼女の病院に入院することを強制しているからだ。外来患者の場合は、その行動が厳格に追跡される。

1986年以降、彼女はソマリアのみで暮らすようになった。最初は首都モガディシュで、飢えに苦しむ何千人もの住民に食糧を提供した。次に南部の町メルカで結核患者の治療にあたった。しかし何度も暴力を振るわれ、一度は誘拐までされたため、この町からは出ることにした。トネリー医師の仕事を引き継いだ女医は、1年後に殺されている。その後トネリー医師は、WHOから結核治療の継続を求められ、比較的平和なソマリア北部のソマリランドに移った。

最近では活動範囲を広げ、体力のなくなった結核患者を襲うHIV/エイズの治療・予防も行っている。また、耳が聞こえない子どもや障害児のために学校を設立し、自らの資金でドイツの慈善団体から年に2回外科医を派遣してもらっている。これによって白内障患者3700人が視力を取り戻した。女性性器切除（FGM）の問題にも情熱を注いでおり、ボラマに関しては実際に切除をほどこす人々を説得して、この文化的慣習をやめさせたうえ、廃止キャンペーンにも参加させていったという。

60歳になっても、トネリー医師は活動の手を緩める気配はない。もしソマリアを去らねばならなくなったとしたら、「別の場所で苦しんでいる人々を助けるでしょう」と彼女は静かに言う。「世界は苦しんでいる人であふれていますから」。

追悼

サドルディン・アガカーン

長い闘病生活を続けてきたサドルディン・アガカーン元国連難民高等弁務官が5月12日、米国ボストンで死去した。70歳だった。イラン出身の皇太子であった同氏は、イスラム教シーア派の一派であるイスマイル派1200万人の指導者カリム・アガカーン4世のおじにあたる。アガカーン氏は亡くなるまで、その人生の後半を人道活動に捧げた。1966年、国連難民高等弁務官に就任したときは史上最年少の33歳で、これに先立つ3年間も副高等弁務官を務めていた。12年間にわたる任期は最も混乱に満ちた時代のひとつだった。71年にはバングラデシュ危機で1000万人が故郷を追われ、72年にはブルンジから数十万人のフツ系の人々が流出。70年代半ばにはインドシナのボートピープルが発生した。

77年に退任した後も、国連を代表してアフガニスタンやイラクを含む世界各地で人道活動を続けた。数冊の著書があり、フランスのレジオン・ドヌール勲章や国連人権賞などを受賞するなど国際的に高く評価されていた。

UNHCR/J. LOWE



サドルディン・アガカーン(1974年)